

オホーツク海

オホーツク海（オホーツクかい、ロシア語：Охо́тское мо́ре、英語：Sea of Okhotsk）は、樺太（サハリン）・千島列島・カムチャツカ半島などに囲まれた海で、北海道の北東に位置する。

太平洋の縁海であり、カムチャツカ半島・千島列島によって太平洋と、また、樺太・北海道によって日本海と隔てられている。

語源

「オホーツク海」の名称は、この海に面して最初に建設されたロシア人の入植都市・オホーツクに由来する。

概要・地形

三方をユーラシア大陸に囲まれており、南に千島列島を通じて太平洋と結ばれている。海域中央部に島嶼は無く、主な島として千島列島のほか、南西部に樺太および北海道がある。また、西部にシャンタル諸島がある。海域の支湾として北東にシェリホフ湾を持つ。主な港湾として、マガダンがある。オホーツク海の表面面積は約152.8万km²、平均水深は838mで、北部に大陸斜面が大きく広がり、南へ向かうに連れて深くなるという特徴がある。中央部は水深1,000メートルから1,600メートルの海盆（便宜的に中央海盆と呼ばれることが多い）が存在し、さらに南に千島海盆と呼ばれる最も深い場所がある。最深部は千島列島近くで水深3,658mである。

日本海とは浅い水深の間宮海峡と宗谷海峡で隔てられているが、太平洋との間の千島列島の海峡は水深が2,000メートルに及ぶもの（北得撫水道）もある。

海流

オホーツク海表層には反時計回りに流れる海流があり（オホーツク環流）、カムチャツカ半島から千島列島北部の海峡を通して、カムチャツカ海流（広義の親潮）の一部が流入する。これらの一部が千島列島の海峡から流出し、千島列島の太平洋側を南下する東カムチャツカ海流と交じり合っって道東沖から三陸沖に分布する狭義の親潮水を形成している。日本海とは、間宮海峡にアムール川河口が存在するために海水の交換はほとんど起こらないが、宗谷海峡から対馬暖流の続流である宗谷暖流が流入し、北海道北東沿岸を流れている。樺太の東部には東樺太海流が流れている。

石油・天然ガス資源

樺太周辺の大陸棚の地下には、豊富な原油・天然ガスが埋蔵されている。日本も参加するサハリンプロジェクトとして海底油ガス田から生産されている。

流氷

アムール川（黒龍江）の水が流入する河口付近では塩分の濃度が低く、密度成層が強くなるため冬季には厳しい寒気団であるシベリア高気圧の影響も受けて海氷が形成される。河口付近以外の海域北部でも12月から結氷が見られ、最盛期の2月にはオホーツク海の7から8割が海氷で覆われる。日本海北部とともに、オホーツク海が北半球海氷が分布する海域で最も低緯度であるのは、このアムール川の河川水

の流入に **よるところ** が大きい。風と海流（東樺太海流）に運ばれた海氷は流氷と呼ばれ、樺太東岸に沿って南下し、時には太平洋岸の釧路市付近まで到達することがある。

生物・水産資源

オホーツク海凍結前の寒気による海洋表層の活発な鉛直混合や、海氷などに **よって** 沿岸から運ばれる碎屑物の影響で植物 **プランクトン** の繁殖に必要な栄養塩が豊富である。このため漁業資源の宝庫で、サケ・マス・タラ・ニシン・サンマ・カニ・アマエビ・ホッカイエビ・ホタテガイ・コンブ・カキが獲れる。なお、樺太付近のカキは海底一面に延々と広がっている。

流氷

流氷（りゅうひょう、英：d r i f t - i c e、**d r i f t i c e**）とは、海に浮かび漂流している氷のことである。海で見られる氷（海氷）は、その運動形態から、海を漂っている「流氷」と、岸にへばりついている「定着氷（英語版）」とに分けられ、定着氷は流氷には含まれない。組成に注目すると、いずれも海氷が凍ってできた氷である。**ただし**、一般用語の「流氷」は、河川から流下した氷も、冰山や氷河が崩れた氷も、海を漂う全ての氷の意として広義に用いられる（世界気象機構海氷用語集の「浮氷」に相当する）。また、海面上の氷に限らず、より広く河川や淡水湖の氷が水面に漂っているものも含めて流氷と呼ぶこともある。北極海や南氷洋（南極海）などのほか、日本近海ではオホーツク海で見られる。

北風によって海岸に打ち上げられた流氷が重なり合って、小さな丘のような形を作ることがある。これを氷丘（ひょうきゅう）と言い、氷丘が水辺にあたかも山脈のごとく、高さ数メートル、長さは長いときには1 **キロメートル** 以上にもわたって造り出されたものを流氷山脈という。

オホーツク海の流氷

自然

日本では北海道の北東に位置するオホーツク海の流氷が有名である。北海道立オホーツク流氷科学 **センター**（紋別市）によると、オホーツク海北岸付近で寒風により海水が凍っては流されを繰り返し、東樺太海流に乗って北海道東部へ南下してくる。オホーツク海は北半球における流氷の南限である。

北海道東部沿岸から流氷が確認できたそのシーズンの最初の日を「流氷初日」という。日本での流氷初日は、平年では北海道のオホーツク海沿岸で1月中旬から下旬頃であり、その後1月下旬から2月上旬頃にかけて接岸する。接岸した初日を「流氷接岸初日」という。その前に、海上自衛隊八戸航空基地（青森県）に所属する哨戒機が空中から流氷を発見・観測し、報道されるのが **1960** 年から恒例と **なっ**て

いる。
風向きによって流氷はさらに南下を続け、太平洋側に位置する釧路市周辺に接岸することもある。春が近づき、沿岸から見渡せる海域に占める流氷の割合が5割以下

となり、かつ船舶の航行が可能になると「海明け」が宣言される。また、沿岸から最後に流氷が見られた日を「流氷終日」という。

オホーツク海のアザラシの中には天敵の少ない流氷の上で子育てをするものもいる。オジロワシなどの鳥類、キタキツネなども流氷に乗ってシベリアから北海道東部までやってくる。

流氷には植物プランクトンが付着している。春になると植物プランクトンは一気に増殖し、これを餌に動物性プランクトンも増えオホーツク海の漁場を豊かにする。なお、流氷の下にはハダカカメガイ（クリオネ）などのプランクトンを捕食する生物も多い。

道東の流氷は観光資源であると同時に、接岸している冬季に巨大地震などによる津波が押し寄せると建物などにぶつかって被害を増大させるおそれがあり、十勝沖地震（1952年）で実例がある。

観光

日本人にとってオホーツク海といえば北の最果ての地という印象が強い。しかし、例えば網走市の位置する北緯44度にはモナコやコートダジュールなどの地中海沿岸の温暖な保養地が位置するように、オホーツク海沿岸などの北海道東部周辺の海域は、世界で最も低緯度の流氷が見られる場所である。

JR北海道の釧網本線では、流氷を眺める列車として、網走－知床斜里間に、流氷ノロッコ号というトロッコ列車を運行していた。この列車は、釧網本線のオホーツク沿岸の区間で列車からゆっくり流氷を眺め、酷寒体験も行えるというもの。かつては吹きさらしの展望車両を設置していた。2017年からは後継列車として流氷物語号が運行されており、オホーツク海を望む展望台がある北浜駅（北海道）と、道の駅が併設された浜小清水駅で長時間停車するために降車して観光を楽しめる。アクティビティでは、北海道斜里町をはじめとしたオホーツク海沿岸で、民間会社等により流氷の上を歩いたり、ドライスーツを着て流氷の海に浮かんでみたりするツアーが企画されている。

また流氷の下の海中に潜るスクーバダイビングも実施されている。

五大湖の流氷

北米大陸の五大湖と大西洋を結ぶセントローレンス川も流氷が流れ着くことで知られている。カナダのケベック市で毎年冬に開催されるアイスカヌーレース（Ice Canoe Race）は、カヌーで流氷をかき分けて対岸を目指すレースで冬の風物詩となっている。

オジロワシ

オジロワシ（尾白鷺、*Haliaeetus albicilla*）は、タカ目タカ科オジロワシ属に分類される鳥類。

分布

ユーラシア大陸、デンマーク（グリーンランド南部）、日本

ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬季になると中華人民共和国東部、ペルシャ湾周辺に南下し越冬する。東ヨーロッパや西アジア、中華人民共和国北東部などでは周年生息する。日本では主に基亜種が冬季に北日本に飛来（冬鳥）するが、北海道を中心に周年生息する個体もいる（留鳥）。2010年1月に開催された環境省の保護増殖分科会では、北海道内で越冬する個体数は約1,700羽（うち、つがい約140組）という数を示している。また、かつては対馬に定期的に飛来する個体がいた。

形態
全長70－98cm。翼開長180－240cm。体重3－7kg。平均4.7kg。全身は褐色の羽毛で覆われている。頭部は淡褐色や淡黄色の羽毛で被われる。尾羽は12枚で短く、やや楔形。尾羽の色彩は白い。種小名albicillaは「白い尾の」の意で、和名や英名（white-tailed）と同義。翼の後縁は直線的で飛翔時には長方形に見える。なお同属のオオワシの方が白い部分が多い。虹彩は淡黄色。嘴や後肢の色彩は淡黄色。

幼鳥は全身が褐色や黒褐色の羽毛で被われ、上面や下雨覆に白い斑紋、尾羽に褐色の斑紋が入る。また虹彩が褐色で、嘴の色彩が黒い。成長に伴い全身の斑紋は消失し、虹彩や嘴の色彩は黄色みを帯びる。

分類

以下の分類は2016年現在IOCで採用されている分類に従う。一方で2016年現在Clements checklistでは亜種を認めていない。

Haliaeetus albicilla albicilla (Linnaeus, 1758) オジロワシ

上記の分布のうちグリーンランドを除く分布域。日本では少数が北海道で周年生息する（留鳥）。冬季にロシアから主に北海道に飛来し、本州北部から中部に飛来することもあり、まれに九州や南西諸島に飛来することもある（冬鳥）。

Haliaeetus albicilla groenlandicus Brehm, CL, 1831

グリーンランド

生態

海岸、河川、湖沼などに生息する。単独もしくはペアで生活するが、冬季になると集団で休む事もある。

食性は動物食で、魚類、鳥類、哺乳類、動物の死骸などを食べる。ヒツジの幼獣、タンチョウの雛を襲い食べることもある。水面付近にいる獲物は急降下して捕らえる。

繁殖形態は卵生。高木の樹上や断崖に木の枝を組み合わせた巣を作り、3－4月に1回に2個の卵を産む。主にメスが抱卵し、抱卵期間は約38日。雛は孵化してから70－75日で飛翔できるようになり、さらに35－40日後に独立する。生後5－6年で性成熟し、生後6－7年で成鳥羽に生え換わる。ヨーロッパでの平均寿命は20年以上とされる。

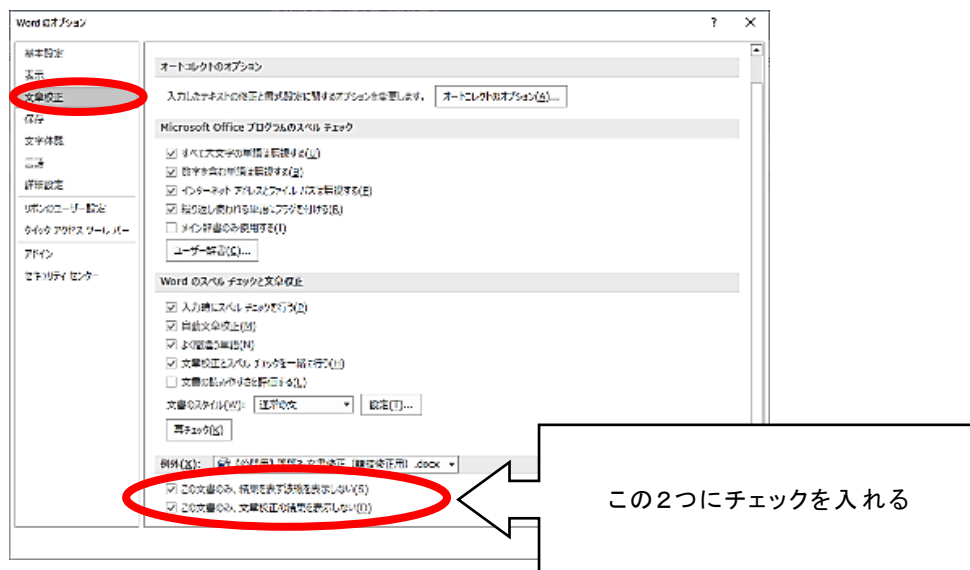
人間との関係

H. a. albicilla オジロワシ

日本では1990年以降は確認数は増加傾向にあるが、一方で近年は繁殖率が低下傾向にある。風力発電所への衝突事故、森林伐採・土地造成・道路建設による営巢地の破壊、湖沼・河川・海岸開発による採食場所および獲物の減少、工事やカメラマンによる繁殖の攪乱、狩猟用の銃弾による鉛中毒、電線による感電死、人工の繁殖地への依存および過密化などが懸念されている。スコットランドでは絶滅したが、再導入された。日本では1970年に国の天然記念物に指定されている。1993年に種の保存法施行に伴い国内希少野生動植物種に指定されている。北海道では1954年に初めて繁殖が確認され、1998年に56ペア、2008年に約150ペアの繁殖が確認されている。2020年代には、釧路湿原で建設が進められている大規模太陽光発電所（メガソーラー）が本種の繁殖への新たな脅威となっていることが指摘されている。

この文書を使用して課題練習を行う際、あらかじめ次の設定をしておく、「Word のスペルチェックと文章校正」の赤波線および青波線が非表示になりますのでご確認ください。

「ファイル」タブ「オプション」で「Word のオプション」内の「文章校正」



※本試験問題は、クリエイティブ・コモンズ 表示-継承 4.0 国際パブリック・ライセンス (CC BY-SA 4.0) のもとで公表された『ウィキペディア(Wikipedia)』日本語版の項目「オホーツク海」「流水」「オジロワシ」を素材とし二次利用し、試験用に一部を編集・改変して作成しています。本問題文は CC BY-SA 4.0 ライセンスの下で利用可能です。

利用項目：

Wikipedia「オホーツク海」 最終更新 2026年6月16日(火)05:04 UTC の版

<https://ja.wikipedia.org/wiki/オホーツク海>

Wikipedia「流水」 最終更新 2026年3月31日(火)14:59 UTC の版

<https://ja.wikipedia.org/wiki/流水>

Wikipedia「オジロワシ」 最終更新 2026 年 6 月 17 日 (水) 02:05 UTC の版
<https://ja.wikipedia.org/wiki/オジロワシ>

ライセンス：

Creative Commons Attribution-ShareAlike 4.0 International
(CC BY-SA 4.0)

<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/>